

落書き倉庫

kageto

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そのうち書いてみようか。とか

こんなの面白いかな。とか

ちよっと思いきや浮かんじやっただけ。とか

そういったものを原作関係なくガシガシ放り込んでいきます。

目次

ISオリ主物	1
真剣恋 オリ主物	8
エヴァ 再構成 男前ゲンドウ	12
魔法科高校の劣等生 オリ主	19
食戟のソーマ 原作分岐?	24
名探偵コナン 再構成	27
ハリポタ 再構成? ギャグ	32
シンフォギア 再構成	36

ISオリ主物

「それじゃあ、ちよいといつてくるか」

頑張つてこいよと言う一夏に手だけ軽く振り、九十九は発進ゲートにゆつたりと歩いて行った。

「あ、あの。織斑先生。九十九君、制服のままでしたよね？」

「ん？ああ、そうだな。だが問題ないだろう、アイツなら」

心配からオロつく真耶の肩を軽く叩いて千冬はモニター前に陣取った。

アリーナ上空でISを展開して滞空していたセシリアは、軽く目を閉じながらも自身の肉体面精神面、機体面での最終チェックに余念がなかった。

いくら相手がISを動かして間もない素人だとはいえ、イギリスという国を一部を背負う代表候補生なのだ。万に一つ、億に一つの敗北があつてはならない。

ザワツ

観客にざわめきが走ったことで相手の登場を認識したセシリアは、ゆつくりと目を開

け、そして絶句した。

I Sスーツに着替えるでもなく、制服のままの姿で、そしてI Sを展開もせず模擬戦用発進ゲートの淵に、地上3メートルを軽く上回る場所に九十九は立っていたのだ。セシリアが声を発しようとするより早く、九十九は生身で地上に飛び降りた。

「なっ?!」

観客席から響きだす悲鳴より先に、救助に向かおうとセシリアが動き出すよりも先に、九十九のI Sが展開の輝きを見せた。

ふわりと音もなく着地したその姿は、漆黒の道着であった。

詳しいものが見たらすぐわかることではあるが、脚甲、手甲に細い鎖の帷子も合わせて展開されている。

そして一番目を引くのが深紅の鉢金。金属部も布部も同色で、布の遊びが腰まで垂れている。

「I S…、だということですか？ソレが」

「展開光をみただろう？これが俺の専用機『夜燕』だよ。さあ、はじめよう。戦の時間だ」

間を置かずに響いた開始の号令に、両者の動き出しは同時だった。

前方に駆け出した九十九と、進行方向を予測したセシリアの狙撃。そしてセシリアは自身の勝ちを半ば確信した。九十九が回避に飛行を使わなかったからだ。

見た目である程度予想はしていたが、九十九のISには飛行機能はないのだろう。

地上を走りまわる九十九に、上空を不定軌道飛行しながら狙撃をしつつ、戦況を見定めた。

「これ以上は無意味ですわ。飛行出来ないあなたではわたくしに勝つのは不可能です」
狙撃を中断したセシリアが九十九に降参するように告げる。

「おいおい。おいおいおいおい。馬鹿を言っちゃあいけない。現状は五分五分だぜ。お前も俺も傷の一つも負ってないんだ」

同じく動きを止めた九十九がセシリアを小馬鹿にしたように反論した。

「それにだ。飛べないってのと、空で戦えないってのは、イコールじゃねえなあ」

瞬間。九十九が駆けだす。しかしそのスピードは先ほどまでの比ではない。傍から見ると黒い塊が赤い線を引きながら駆け抜けているようにも見える。アリーナの外周にそった走行軌道を取っていた九十九が、スピードを一切緩めず、壁を駆け上がり、ドーム状の防壁をも駆け抜けた。

『はあっ?!』

観客席からの驚愕の声も気にせず、九十九は走り抜け、セシリアは撃ち落とさんと狙い撃つ。

セシリアとの距離が近くなったタイミングで壁を蹴り、ついに二人は近接接敵を果たした。

ふわり

先ほどまでのスピードが嘘のように柔らかい動きでセシリアの構えた狙撃銃の上に九十九は着地した。

(軽い?)

しゃがみ込むような体勢で着地した九十九の重量が手に伝わらないことで、刹那の疑問が頭をよぎる。疑問は戸惑いに、戸惑いは隙に。そしてその隙は近接戦において充分過ぎる時間である。

狙撃銃にスピードのプラスされた九十九の体重が乗っかってきたのだ。

着地したように見えていたが、九十九は壁を蹴ってから接敵するまでに、あえてゆつくりと体を動かすことで、柔らかい動きで近づいたように見せ、銃に着地する直前であたかも着地したかのような動きをして見せたのだ。

セシリアの、人間の脳を騙すために。

70kgそこそこの九十九の体重に壁を駆け上がることができるほどのスピードが

加わると、自動車事故さながらの衝撃が発生する。

構えていた銃に真上からその衝撃を受けたことで、前のめりに体制が崩れた。

(まずいっ！)

ためらうことなく銃を手放したセシリアの左肩に衝撃が走る。空中で体勢を変えた九十九に蹴り落とされたのだ。いくら見た目が生身であっても、ISであることに変わりはない。九十九から放たれた打撃はセシリアを地面にたたきつけた。

(エナジーはまだ大丈夫！)

半分以上削られてしまったゲージから一瞬で視線を切り、両手に使い慣れない拳銃を展開し、同時にブルーティアーズも周囲に展開する。

「ちっ。さすがは代表候補生。態勢の立て直しが早いな」

着地した九十九に拳銃の照準をきっちり合わせたまま、セシリアは隙を見せないように立ち上がる。

「壁を走るだなんて非常識ですわ。礼儀的な意味合いではなく、人間の固定観念的な意味で」

「戦なんて常識にとらわれた方が負けるもんだらうが」

「なるほど、至言ですわね」

常識にとらわれた方が負ける。その言葉にセシリアは一つの答えを得ていた。

広がる様に展開していた4機のティアーズから唐突にビームが発射される。

「おい、そんな見え見えの不意打ちいっ?!」

まっすぐ飛んでくるビームをよけようとした九十九の目の前で、『ビームが曲がった』
「つつー。ビームが曲がるたあどういうことだよおい」

「あら。常識にとらわれた方が負けるのでしよう?」

毒づく九十九に、セシリアは淑女然と微笑んだ。

「ああくそ。これは一本取られたな。たった今俺が言ったばつかじゃねえか」

「ええ。あなたのその言葉があつたからこそ、私は私の中の壁を越えることができました。感謝を」

セシリアは膝を軽く曲げるだけの略式のカーテシーで感謝を示した。

「よーしよし。じゃあ続きと行こうじゃないか」

「ですわね。踊ってくださいる? ジェントルメン」

「いい曲を奏でてくれるなら、いくらでも」

4機のティアーズからビームが、2機のティアーズからミサイルが、そして手持ちの拳銃2丁から弾丸が九十九を封殺せんと襲いかかる。

しかしそのことごとくをしゃがみ、跳び、転がり、身をひねり、果ては脚甲手甲で軌道をそらし、弾くことで九十九は距離を詰めきる。

セシリアはティアーズ全6機の集中砲火で九十九が大きく回避動作を取った隙に拳銃のリロードを行い、間髪いれずに九十九に照準を合わせた。

1 m程の超至近距離。力みなく向け合った拳と拳銃。二人はたがいに笑みを浮かべた。

「ファイナーレですわね」

「良い舞曲だった」

セシリアが引き金を引くよりコンマ数秒早く、九十九がその身を深く沈め拳を突き出した。

(そこっ！)

引き金を握りこむのとほぼ同時に、セシリアは体をひねり拳を回避する。そして九十九へその拳銃を向けた。

はずだった。

そこに九十九の姿はなく、自身の腹部に添えられた拳の圧力を感じた。

「これにて幕引き。強襲術『燕返し』」

腹部への衝撃が残りのエナジーを削りきったのを確認して、セシリアはそつと目を閉じた。

真剣恋 オリ主物

鉄心翁との面会を終え、川神院を辞そうとした時に、気の塊のような人物が飛び込んできた。

いくつか年上であろうその人物は、人の身に内包するにはあり得ないと思われる気量を抑えもせず、むしろ自身で溢れさせている、女性であった。

「じじい。面白そうな気をした客人が居るじゃないか。私の対戦相手に呼び寄せたのか？」

「こちらを品定めするように向けられる視線を無視して、鉄心翁に視線を向ける。

「鉄心翁。こちらは身内の方で？」

「い、いやはや恥ずかしながらワシの孫でとう。百代というのじゃが。技と体は備えたのだが、心の教えが足りなんだ」

「なんとも嘆かわしい。これならまだそこらの子供に武を説く方が建設的じゃないか。これではただの獣だ」

川神百代に視線を戻し、改めてその力を観察する。気は人の域を超えているが、身体は普通より少し鍛えた程度。早くから気を使う事に慣れ過ぎ、武人としての身体づくり

が疎かになつてゐるのだろう。

「何だ客人。面白い事を言うじやないか。私が獣だと?」

「鉄心翁。お孫さんをもう一度鍛え直すがいいでしょう。その下準備は私がしましう」

鉄心翁に言い捨てると、百代嬢の懐に入り込む。

「なっ?!」

間合いを詰められるとは思つてなかつたのだろう百代嬢が驚きの声を上げ、間合いを取ろうとするが、それより早く百代嬢の丹田に手を添える。

「あなたはこの気があるから勘違いをしている。ですので気を取り上げましょう」

「何を言つてるっ!」

今までそうしていたのだろう反射行動で拳をこちらに振るうが、痛みなどない。

ちよつと鍛えた程度の女子高生の拳など、気を纏つた人間には蚊ほどの痛みも届かないのだから。

「な、何を……。なにをしたあつ!」

自身でも気が付いたのだろう。自身の拳に気乗せることができない事に。自身の体から気を生み出せない事に。

「言つたでしょう。気を取り上げると。あなたはその状態でもう一度武をやり直しなさい

い」

百代嬢を鉄心翁に向かつて投げる。鉄心翁は百代嬢が暴れないように抑え込むと、こちらに深く頭を下げてきた。

「必ず鍛え直して見せましょう。その時には……」

「獣でなくなるのであれば気を戻すこともやぶさかではありません」

「こちらを親の敵のごとく睨みつける百代嬢と目を合わせる。」

「百代嬢。その状態で人として強くなりなさい。あのままでも強くなれたでしょうが、それでは獣の王だ。あれほどの気を暴走させない胆力があるなら、あなたは人の王、その先の武の王に、本当の意味での武神すら手が届くでしょう。あなたが人の道に戻った時に、再び気を使えるようにしてあげましょう」

「私は、強くなれるんだな。今よりも」

「今のあなたではどれほど鍛錬を積んでも鉄心翁には勝てません。ですが、人の道にて鍛錬を積んだ先では、鉄心翁程度ではあなたに勝てないでしょう」

百代嬢が身体から力を抜く。彼女の力への固執は異常だが、そのあたりは鉄心翁が何とかするだろう。

さて、と呟いて背後に現れた人物に身体を向ける。

金髪の巨軀。年の程は鉄心翁と変わらないだろうが、見た目は30代後半から40代

中盤にかけて。異常なまでに鍛えられた体の維持も含めて気に頼り過ぎている。

「大きな気が消えたのを感じて飛んできたのだが、川神鉄心。川神百代のそのザマは何だ」

「なるほど。百代嬢が獣の道をひた走っていた原因の一端はあなたですか」

「なんだ赤子。俺は今川神鉄心と話している」

エヴァ 再構成 男前ゲンドウ

『ぐうっ』

モニターから響くシンジの苦悶の声。バルディエルに馬乗りで首を絞められている初号機のダメージがフィードバックしているのだ。

「伊吹二尉。ダミーシステムの準備だ」

「し、しかし。ダミーシステムの使用には赤城博士の許可が……」

「パイロットを死なせたいのかっ！」

「りよ、了解です」

普段見ることのないゲンドウの激情にマヤはダミーシステムの起動準備に取り掛かる。

「シンジ。返事はいらん。集中しろ。こちらが合図をしたらグリップから手を離して首に力を入れる。首を折られないという強い意志を持って」

『な、なに、を……』

「返事はいらんといっただろうが。反撃に出る。鈴原君を助けたければ言う通りにしろ」

『た、すける…』

「今だ！手を放せ。ダミーシステム機動」

ゲンドウの声にシンジは手を離して首に力を入れる。同時にダミーシステムが起動して操縦権をシンジから奪い、暴走と変わらない動きでバルディエルを圧倒し始める。

「時間がない。よく聞け。お前の技量ではエヴァを乗っ取った使徒には勝てん。戦闘はダミーシステムに任せろ。降りてきたバイザーの横に緊急停止スイッチがあるのはわかるな。それを押せばダミーシステムは止まる。ダミーシステムが使徒にとどめを刺す直前に緊急停止。操縦権を取り戻しエントリープラグを回収。できるな」

『それでトウジが助かるならやってやるさ』

「いい返事だ。集中しろ。タイミングを間違えるな。緊急停止から操縦権復帰までのタイムラグは心配するな」

『了解』

短い返答を返してシンジは戦闘の行方に集中する。ゲンドウはすぐに二号機に通信をつなぐ。

「惣流君」

『状況把握。シンジが復帰する時間を稼げばいいのね。けど私じゃ腕二本が限界よ』

「十分だ。レイ」

『はい。残りの二本は私が止めます』

「総員戦況に集中しろ！我々大人のミスで子供に人殺しをさせるな！誰一人死なせず使徒を殲滅する！」

《了解》

司令室の各所から返事が返ってくる。ゲンドウはサングラスを外し、戦闘を見逃すまいとモニターを注視する。

『アスカ！綾波！』

シンジが叫びながら緊急停止ボタンをたたくように押し、グリップを覆っていたカバールを蹴とばした。

『ファースト右！』

二号機が零号機に声をかけると同時にバルディエルの右側の腕二本を抱きつくように抑え込んでバルディエルの体をうつ伏せにひっくり返した。ワントンポ遅れて到着した零号機が右側に回ってきたバルディエルの左腕二本を抑え込む。

『トウジをかえせー！』

操縦権を取り戻したシンジがエントリープラグを引き抜く。

引き抜いたエントリープラグを左わきに抱え込みながら右手でプログレッシブナイフを背中から参号機のコアにつきたてた。

「初号機ATフィールド全開！殲滅後の爆発からエントリープラグを守れ！」

ゲンドウの声にパイロット3人の動きは早かった。ナイフの先端がコアに刺さると同時に初号機が離脱。ATフィールドを展開しながら背を向けて逃げ出した。次いで零号機が腕を離して二本目のナイフを突き刺し初号機と同じようにATフィールドを展開しながら初号機とバルディエルの間立ちふさがった。最後に二号機が腕を離すと同時に二本のナイフを思いつき踏みつけてコアに押し込んだ。踏み込んだ勢いを使ってバク転を繰り返しながら零号機の背後に着地すると零号機のATフィールドに重なるように自身もフィールドを展開して衝撃に備えた。

パイロット3人に言葉でのやり取りはない。シンジが動き出したと同時に二人が考えをくみ取ったのだ。

【この至近距離ではATフィールド越しでもエントリープラグは持たない】

何度も使徒と戦闘をこなしていたパイロットだからこそその判断だった。

こうして第13使徒バルディエル殲滅は一人の死者を出すことなく終わりを告げた。

「よう、センセ。辛気臭い顔しとんなあ」

ネルフの病院の一室。トウジが目を覚ましたとの知らせを受けてシンジは病院に駆け込んできていた。もう一つの知らせも同時に受けて。

「トウジ…」

ベッドに横たわるトウジは顔をシンジに向けはするが、体を動かさない。

「体のこと…」

「動かんようになってもうたわ」

神経接続が切れていなかったため、エントリープラグを抜いた際に首周りの神経にダメージがフィードバックしていたのだ。

「ごめん。ごめんトウジ」

「なんやセンセ。泣くこたないやろ。生きとつたんや。それでもすごいこっちゃ」

明るくふるまうトウジにシンジの涙は止まらなくなる。

「それにな。センセのおとんがきよつてな。ネルフの最新治療トリハビリで治してみせて豪語していきよつた。ネルフの技術はスゴインやろ。きつと治るわ」

シンジは泣きながら何度も何度もうなずいた。

「なあシンジ」

トウジからセンセではなくシンジと呼ばれたことに驚いて、シンジは顔をあげた。

「前に、殴つてすまんかったな。戦闘に首突つ込んですまんかったな。今回エヴァにのつて思い知った。怖いで。めっちゃ怖い。わかつたつもりになつとつたけど、想像以上やった。やから、すまんかった」

「いいよ。トウジが治つたら一発殴らせてくれたら許すさ」

「許すのに殴るんか。ひどいやっちゃなあ」

「トウジ風というなら根性ババ色だからね」

病室の外でアスカは壁にもたれながらヒカリの頭を胸に抱きしめていた。

「泣いときなさい。でもあの馬鹿の前では笑つとくのよ」

アスカの胸で声を殺すようになくヒカリは、トウジが生きていた喜びと、体が動かないほどのけがを負った悲しみにのまれていた。

「ごめんヒカリ。私たちがもつと強ければあんな状態にならなかつたかもしれない。ごめん」

胸の中で首を横に振るヒカリを感じながら、アスカは奥歯を強くかみしめた。

(強くなる。今よりもっと。三人で)
それは決意ではなく、誓いだった。

魔法科高校の劣等生　オリ主

「ちよいとお邪魔させてもらうよ」

軽い声掛けと共に一校のテントに入つて来たのは小柄な老女だった。

「ばあちゃんっ!？」

ヨミトが驚きの声を上げる。彼の祖母であるこの老女、アニタ・キングは齡90を超えているのだ。会場まで足を運ぶほどアクティブだとは言えない。

「必要そうなものを一纏め、トランクに詰めたのを外に置いてるよ。それと」

アニタはヨミトの目をしっかりと見据えて告げた。

「ねね姉から、名乗るからには先生に負けないくらいすごい所見せてこい。だって」

「がんばんなさいよ。といってアニタは年齢を伺わせない軽い足取りでテントを去つて行つた。追いかけてしようとしたが必要ないといわれてしまい、去つてゆく背中をただ見送る。

「ヨミト。これ」

雫がテントの外からキャリータイプのトランクを引いてきた。それは実家でもう一

人の祖母が誰にも触らせる事なく大切に保管していたソレだった。

このトランクを渡されることの意味。その重さともう一人の祖母の想いに鼻の奥がツンとする。

愛でるように優しくトランクを撫で、そつとあける。中には1着のコートとやぼったい黒縁眼鏡。そして所狭しと大小様々の紙がつまっていた。

「コートにメガネと紙？」

後ろから覗き込んでいた一同の疑問を代表する様に真由美が声を出した。

「名前ばかりの後継者が、本物として名乗ることを認められた。その証です」

メガネを黒縁に掛け替える。度は自分に合うように調整されている。少し大きめでややずり下がるのは先代同様だ。

「十文字会頭」

ヨミトは十文字に向き直り、ある事を頼む。

「問題ないだろう。しかし、存在すると聞いてはいたが、まさかお前がそうだとはい

本部へ行って来ると。テントを出る十文字にヨミトは深く頭を下げた。

達也が持つてきたマントを脱いでトランクからだしたコートに袖を通す。コートのある各所にある隠しポケットに紙をしまいこんでゆく。

その様子を見ていた達也がヨミトに声をかけた。

「問題ないな？〈ザ・ペーパー〉」

「コートとメガネと紙に誓って」

テント内に広がった驚愕の雰囲気置き去りに達也、レオ、ヨミトの3人は会場入りした。

新人戦モノリスコード決勝

会場は新人戦とは思えないほどのざわめきに包まれていた。

大会本部から漏れた情報。一校の臨時選手にリードマンの姓を名乗る者がいる。真実か確かめずにはいられない情報。

世界を救った英雄 読子・リードマン。彼女の血族が存在していた。だとするならば英雄の称号《ザ・ペーパー》も継いでいるのかもしれない。

多くの人々がそれぞれの想いを胸に、試合開始を待っていた。

両校の選手が開始位置についたことで中継カメラからの映像がモニターに表示され、合わせて選手の紹介映像も表示された。

第一高校の3人目の選手。そこにその名前があった。

読人・S・K・リードマン

16代目《ザ・ペーパー》が表舞台から姿を消して以降誰一人として名乗ることのなかった姓が確かにそこにあった。

一校応援席でエリカたちはヨミトの姓について盛り上がっていた。

「ヨミトの名前ってヨミト・S・R・キングでしょう？まさかRがリードマンのRだったなんてね」

「Sは董川ですよね」

エリカと美月の会話にさらに雫が加わる。

「キングはさつきテントに来たおばあさんの名前だつて」

そう言つて一校応援席の後ろの方に視線を向ける。そこにはアニタの姿があった。雫の視線に気づいて軽く手を振ってくる。

「さつき少し話したけど、あの人も紙使いだつて。《ザ・ペーパー》と同時期に活動してたから《ザ・ペーパー》を名乗ることはなかったんだつて」

本当はそれ以外にもいろいろな確執があるのだが、その辺まで話すことはなかった。

「あ、ヨミトくんの名前が」

ほのかが選手紹介映像のヨミトの所を指差した。そこにはヨミトのフルネームが消えて、『17代目《ザ・ペーパー》』と表示されていた。

会場のざわめきがまし、隣の声すら聞こえないのではないかと、
いうほどになった。

食戟のソーマ 原作分岐？

「にしても、りんどう先輩も思い切ったっすねー」

「にや？」

薊に続いて雪積もる駅から去ろうとしていた竜胆に創真が声をかけた。

「いやだって、将来自分の店を持つ夢を捨ててまで中村先輩につくんですもん。思い切った選択してるじゃねーっすか」

「いやいやいや。あたしいつか自分の店だすつもりだけど」

普段と変わらないふんにやり顔で創真の言葉を否定する。

「いや、店出すっつっても資金どうするんすか。飲食店の開業資金、個人で用意できる額じゃないっすよ」

「ふつーに銀行に融資してもらおうっしょ？」

竜胆の返答に創真は何いってんだこいつという表情で首をかしげた。

「中村先輩の側についた人たちに融資する銀行や個人がいるわけないじゃないっすか」

「どーゆーことだよー」

ふんにやり顔から若干真剣みのある顔に戻った竜胆が創真に向き直る。

「いくら遠月卒業つっても、十傑つつもすぐに自分の店出せるわけはないのはわかるっすよね」

「そんなことは当然わかってるぞ」

「どこかの店で実績積んで、その実績でもって銀行に融資を頼むわけですけど、中村先輩についた人たちを雇う店なんてあるわけないじゃないっすか」

「なんでそーなるんだよ」

「いや普通に考えてそうでしょ。中村先輩の認める店以外すべてつぶす宣言してるんすから。それに十傑の先輩方は雍切のじーさんをクーデターで引き摺り下ろしたじゃないっすか。自分の店でも同じ事されかねないのに雇う人普通じゃないですって」

創真の言葉に反逆者連合から「あー」という言葉が漏れる。

「それにももうまく実績積めたとしてっすよ。中村先輩のやり方だと、当然料理のクオリティは素材の段階から高くなるっすよね？」

「その認識で間違いはないね」

創真の問いかけを薙が肯定する。

「そうなるも当然単価が上がるっすけど、利益率どうするんすか。あと集客率とリピート率。利益率はまあ金ある人たちが相手の店つてことにすれば望めなくも無いっすけど、そうすると集客率とリピート率考えたら赤字確定じゃないっすか。そんな未来しか見

えない店に銀行は融資しないっすよ」

「え、えー」

竜胆の目がぐるぐると回りだしている。話の内容がわからないのではなく、その話題が創真から出たことに混乱している。

「遠月から融資は望めないっすよ。今回の中村先輩のアレコレでスポンサー下りてるとこ多いでしょうし」

「事実じゃな。実際に融資継続を断る話は多いぞ」

仙左衛門が大きくうなずいて肯定する。

「つまり、中村先輩が勝つても、俺らが勝つても、そっちについた人らの将来出店の夢は無いんすよ」

名探偵コナン 再構成

「は？合同研修ツスカ？」

小五郎は上司である小田切に素頓狂な声で聞き返した。

「ああ。警視庁とアメリカのFBIで銃の扱いに関する研修を行うことになってな」

「なんでまたFBIなんかと・・・」

「最近銃で威嚇しなければならん事案が増えてるだろう？しかし日本の警察は銃の使用に関しては言ってしまうば臆病だ。そこで銃の使用に長けているFBIに銃による制圧のいろはを教えてもらおうってことらしい」

「はあ、わかつたような、わからないような」

眉間にしわを寄せて首を傾げる小五郎に小田切はニヤリと笑った。

「おまえさんの銃の腕は俺らよりも頭一つ抜けてるからな。それをもう一つ上に引き上げて来い。ついでにFBIの捜査についても色々聞いて来い。それでおまえさんは刑事としての腕をみがけ。いずれはこの席にお前が座れるようになってもらうつもりだからな。励んで来い」

小田切の思いもよらぬ激励に小五郎はビシッと敬礼をした。

「不肖、毛利小五郎。粉骨碎身研修に務めてまいります」

「ぶはあく。一週間の研修が終わった後に飲み会つーのはいいもんだな。で、赤井おまえすぐむこうで現場入りなのかよ？」

「はい。私はまだ見習いみたいのものですから、これから色々叩き込まれると思います」
研修の打ち上げの片隅で、小五郎は同じ研修参加者の赤井秀一に声をかけた。

「はあー。おまえみたいな銃の名手でもまだまだ見習いとは、さすがFBIだな」

「毛利さんの銃の腕もすばらしいじゃないですか。正直言って日本の警察でここまでの腕を持つ人がいるとは思っていませんでしたよ。特殊機動隊とかならまだしも」

「まあ、才能があつたんだろうけどよ、日本の警察じゃ使い道なんて無いさ。無い方がいい」

「そうですね。日本は銃社会じゃないですから、そのほうがいいでしょう」

「そういうこつた。よしおまえも飲め。成人はしてんだろ？」

「はい。いただきます」

小五郎がかざしたビールを赤井はグラスで受けて笑った。兄というものがいたらこ

ういう感じかと思いつながら。

数年後

コンコンコン

「あいてるよ」

事務所の扉をノックする音に小五郎は広げていた新聞から目を離した。

入ってきたのは野球帽を目深にかぶった青年だ。

「どんな御用で? どんな依頼でもこの毛利小五郎が解決して見せますよ」

探偵、毛利小五郎としての顔を作り、怪しげな青年を迎え入れた。

「お久しぶりです。毛利さん」

青年が帽子を脱いで毛利に挨拶をした。

「赤井!? 赤井じゃねえか。久しぶりだなあ。何年ぶりだ」

「そうですね。かれこれ6, 7年になるかと」

「まあ座れよ。にしてもいい男になったじゃないか。仕事も順調そうな顔してやがる。

自信がうかがえるな」

「それなりに修羅場を潜り抜けましたからね。アメリカの暗いところはなかなかスリリングです」

応接用のソファに向かい合って座った二人は昔話にしばし花を咲かせた。

「けどまさか、毛利さんが警察を辞めてるなんて思いもませんでした」

「銃をな。撃つたんだよ。人質をとった犯人に向けて」

小五郎はソファに身を沈め、吐き出した。

「人質は妻だった。銃弾が人質の足を掠めたことが問題視されてな。一応依頼って形をとらせてもらえたよ」

「・・・なるほど、さすがは毛利さんですね。いい腕をしています。人質の足を掠めるように撃てるとは。私はその状況でそれだけのことを出来る自信はないですよ」

「まあ・・・な。けど、後悔がないかといえば嘘になる。妻の足を狙う夫たあ世も末さ」
「心中察して余りあります」

「ま、過ぎたことさ。今はこうして探偵業でやってけるしな」

しみみりした空気を振り払うかのようにおどけて見せた小五郎に赤井はさびしそうに笑った。

「そつちも順調らしいですね」

「ま、それなりに、な」

「・・・それを見込んで依頼があります」

「話してみろ」

「今FBIはある組織をひそかに追っているんですが、日本で潜入捜査を行うことになりました」

「どんな組織だ」

「詳細はわかっていません。ただ、ありとあらゆる犯罪を当たり前のように行う組織です。そして彼らの特徴は大まかに二つ。服装が黒尽くめであること。そして、幹部クラスには酒の名前コードネームが与えられること」

「黒服にコードネーム。スパイ漫画みたいだな」

「まさにそれです。警察内部や政府にも手が伸びてるらしいです」

「ちっ。ほんとにスパイ漫画じゃねえか」

小五郎は乱暴にタバコに火をつけると、ガシガシと頭をかいた。

「で、おまえ自身の安全は確保してあるんだろうな?」

「いえ。安全がどうかいってられない状況です」

「あく。くそ。で、そんな状況で持つてくる依頼なんてろくでもないんだろう。とつとと話せ」

ハリポタ 再構成? ギャグ

飛行術の授業の始まるのを目前としてグリフィンドルとスリザリンの一年生は興奮を隠しきれず各々の友人と空を飛ぶということについて語り合っていた。

やれ家で飛んでいた。やれ親に箒を買ってもらった。期待に胸膨らます様はほほえましい限りである。

「ロン！ やっぱり魔法使いも空を飛べるんだね！ 箒で飛ぶとか物語のまんまだ！」

「もちろんさ！ ねえハリー。君、クディッチをしってるかい？ 箒に乗ってやるスポーツなんだ！ 魔法界で人気ナンバーワンなんだぜ」

ハリーとロンも多分にもれず盛り上がっていた。

「なんだ、ポッター。魔法界の英雄様は空を飛ぶことも出来ないのかい？ 僕は父上に買っていただいた箒で毎日のように飛んでいたよ。飛ぶことに関しては自信があるね」
せつかく盛り上がっていたのにドラコに水を差されてロンが露骨にいやな顔をした。
ドラコはかまわず続ける。

「その貧乏人のウィーズリーだって飛んだことがあるというのにねえ」

ニヤニヤと笑みを浮かべるドラコにロンが噛み付いた。

「ハリーは今までマグルに育てられてたんだ！飛べなくつても仕方ないことだろう？！そんなこともわからないのか。マルフォイ」

「え？僕飛べるよ」

「はあ。」

いつもの如く口喧嘩が始まるかと思いきや、ハリーの発言でロンとドラコはポカンと口をあけて固まった。

「ただ箒を使って飛ぶ方法がわからなかったから、ちよつと不恰好なんだよ。見てて」

そう言つてハリーは校舎に向かつて全力で走り出した。そのまま壁にぶつかると思いきやスピードに任せて壁を垂直に走り上つていった。

「いやいやいやいや」

ロンとドラコがありえないものを見たとばかりに首を振る。

そんな二人をよそに、屋根まで駆け上がったハリーは屋根を踏み切つて大きく空に跳びあがつた。

「ハリー。それは飛行じゃなくて跳躍よ」

偶然近くで様子を見てたハーマイオニーがポツリとつぶやいた。確かに跳躍である。ただしその跳躍高度はヒトの限界高度を超えていた。

「なあ、マルフォイ。人間つてあんなに高くジャンプ出来たんだな」

「待て、ウィーズリー。確実にあいつだけだ」

空高く跳躍するハリーを二人は半ば呆然としながら見上げていた。

そしてそろそろ跳躍も最高高度に到達して、あとは落下するばかりだろうと誰もが思ったその時。

ハリーは空中を蹴ってさらに高く跳びあがった。

「は？」

見上げる全員が呆然とする中、空中のハリーは何も無い空中を縦横無尽に蹴ることで前後左右上下好きな方向に移動していた。

「なあ、マルフォイ。悪いんだけど僕の頬をつねってくれないか」

「かまわないが、僕の頬もつねってみてくれウィーズリー」

呆然としながら互いの頬をつねる二人だったが、その痛みから夢でないと諦めた。

「最近僕思うんだけど、ハリーに魔法っているのかな？」

「魔法使わなくても魔法と同じこと大体出来るよな」

ロンとドラコは大きいため息をついた。

た。ハーマイオニーは死んだ魚のような目で、空から手を振るハリーに手を振り返していた。

シンフォギア 再構成

ツヴァイウィングのライブ事件から1ヶ月後、動画投稿サイトにある1本の動画が投稿された。

病院のベッドの上で上体を起こした少女が映った、シンプルな構成の動画だ。

ただ、その少女は顔のほとんどを包帯で包まれ、その素顔を見ることはできないものだった。

『私は立花響。今世間を騒がせている、ツヴァイウィングライブの生き残りです』

その言葉から始まった動画は、あの日、あの場所で彼女が何を見て、何を体験したのかを訥々と語る内容で進んでいった。

突然のノイズの出現。パニックになる観客。人波に弾かれ倒れ伏した彼女の全身を瓦礫編が直撃し、目が見えなくなり絶望するさなかにツヴァイウィングの片翼、天羽奏の声が届こえたのだと。

『奏さんは私にこう言いました。『生きるのを諦めないでくれ』と。意識の薄れゆく私に力強く、言ってくれたんです』

そういつて彼女は自身の顔を覆う包帯を解いた。そこにはつぶれた両目が傷の癒えきっていない状態で、彼女が二度と光を見ることがないことを物語っていた。

『私のこの眼は、もう何も見る事ができないそうです。でも、私のお父さんは、よく私に困ったことがあつても、へいき、へっちゃら。と言つて自分を奮い立たせるんだ。そうすれば拓ける道がきつとある』と言つていました。私は子の言葉と、奏さんがくれた言葉。『へいき、へっちゃら』と『生きることを諦めない』の二つを胸に刻んでこれから生きていきます。生き続けていきます』

彼女は大きく息を吐き、言葉が続けた。

『今回のことで多くの方が亡くなつて、私を含めてごく少数しか生き残れなかつたと聞いています。私を助けてくれた奏さんも亡くなられたと聞きました。私のこの眼は、もう涙を流すことすらできません。声をあげてなくともできません。でも、だからこそ、私は声をあげてこういいいます。『へいき、へっちゃら』『生きるのを諦めない』と。だつて、あの日、ノイズが出るまでは、あの場にいたみんなが幸せだつたんです。ツヴァイウイングの二人の歌に幸せを感じてたんです。私は、そのことを覚えていたい。忘れたくない』

彼女は再び息を吐き、さらに続けた。

『ご遺族の方には、生き残つた私から、なんて声を書けたら言いかわかりません。わから

ないから、代わりに聞かせてください。亡くなられた方の事、メールでもいい。手紙でもいい。直接会いに来てくださってもいいです。私があの日感情を共有した人の事、教えてください。それで何かが解決するわけじゃない事くらいわかっていきます。それでも、聞かせてほしいんです。私が、そしてご遺族の方が『生きるのを諦めない』ために。あ。ただ、電話をかけるのはやめていただけるとうれいす。回線がパンクしちゃうらしいので。動画の最後に私のメールアドレスと家の住所、私が今入院している病院の住所を載せます。ご連絡、待っています』

彼女が深く頭を下げて、画面が暗転し、彼女が言っていたようにメールアドレスと自宅の住所、病院の住所が表示されて動画は終わった。

個人情報が載っていたため、動画自体はすぐに削除されてしまったが、さまざまな場所に転載され、動画が消えていく事はなかった。

ここから同じ設定のGXでのシーンを

「さて、マリアはママへの対応でしばらく戻ってこない。少し、話をしようじゃないか」
ウエルは未来の目の前に座り込むと、檻を挟んで向かい合った。

「キミは物語を読むかね？」

ウエルからの突拍子もない質問に、未来は目を瞬かせながらうなずいた。

「ボクもね、本を読むのがすきだね。幼少のころは英雄譚にのめりこんだものだった。そして、ボク自身が英雄になりたい。そうおもってたんだよ」

ウエルはそういつて苦笑する。その笑みが先ほどまでの、どこか狂気染みたものではない事に、未来は驚きを隠せないでいた。

「ああ、さつきまでは、言ってしまうと演技に近いからね。こっちが素なんだよ。まあいい。英雄になりたいと思いがちながらも、ボクは英雄になる事はできないでいた。科学者として実績を残そうにも、画期的なものがそう簡単にできるものではないしね。そんなときに研究所の同僚にいた日本人に、あるアニメをみせられてね。その作品で、英雄的な主人公がピンチに陥ったときに、仲間の博士が『こんなこともあろうか？』なんて言うて主人公を助けるんだ。ボクは天啓を得たとおもったよ。英雄を助けた博士の行動が英雄的だと思ったのさ」

ウエルの話の意図がつかめず、眉間にしわがより始めた未来に、ウエルは苦笑を向け

た。

「ボクはね。今、その博士の立ち居地であらんとしてる。僕が見出した主人公は二人。一人はマリアだ。世界を救おうと、世界を見捨てようとする政治家を糾弾しようとする彼女は、英雄的だろう？だが、彼女も、ママも甘すぎる。そして優し過ぎる。だからボクが黒幕を演じて彼女を英雄にするのさ。でもそうなると困った事に、ボクが英雄であつたと誰も知らないまま終わってしまう。だから君には知っていてほしかったのさ。ボクが彼女たちを裏で支えた行動を」

「そんな。あなたもマリアさんたちと一緒に・・・」

「それは出来ないんだよ。ボクが彼女たちの動きに合流したときには、彼女たちのシナリオはポイント オブ ノーリターンを過ぎていた。修正が出来ない段階だったのさ。だからボクは、全てが終わったときに彼女たちが世界に受け入れられる足がかりを作るために動くしかなかったのさ」

ウエルの言葉に、未来は口を押さえた。

「もうすぐボクは、ネフィリムと融合する事で狂気を増していく事になる。おそらくボクはボクでいられないだろう。世界最大の極悪人はボク一人で、ボクが英雄になるために彼女たちを利用した。そういう結末になるはずだ。だから、その前に、ボクが見つけたもう一人の主人公に手助けをしておきたいとも思っている」

「だれなんですか？そのもう一人の主人公って」

「立花響くんだよ」

ウエルから出た名前に、未来は目を見開いて驚いた。

「彼女の動画をボクも見たよ。そして、彼女がシンフォギア装者になった事を知ったときに、ボクは昔やっていた研究を秘密裏に昇華させた。その研究があれば、彼女にもう一度光を与える事が出来る」

「響の目が見えるようになるんですか!？」

「眼球の復元は今の医療技術でも不可能に近い。いや、不可能だ。だから別の受信装置をつければいい。視覚情報も含め、人の感覚は全て電気信号だ。極端なたとえになるが、カメラで撮ったものを電気信号に変換して脳に伝達してしまえばいいんだ」

「機械の義眼。ということですか？」

「キミは理解が早くて助かる。装者になった当初の立花響の写真を見た。彼女が普段傷跡を隠すためにつけているバイザーにカメラを取り付け、後頭部から脊髄に入力装置をつなげる。それで問題はない。ただ、試作機とデータを二課に届ける手段が今のわれわれには1つしかない」

ウエルは白衣のポケットから小型端末を出すと、目的のデータを開き未来に渡した。

「キミの体に取り付ける。二課は君を取り戻しにくるから、確実に回収される。人体実

験と言われても仕方のない諸行だが、どうするかね？」

「それで響きに光が取り戻せるなら！」

「即答とは恐れ入るね。君も正しく英雄を助けるものだよ」

ウエルは立ち上がると、未来を檻から出した。

「後一つ、君の寮の部屋宛にある書類が後日届くように手配してある。全てが終わった後に着くはずだ」

「何の書類なんですか？」

「それは見てからのお楽しみと言う事さ。さて、はじめようか」

G X 終了後数日〜1週間後くらい

「おかえり未来〜。なんか未来に届いてたから、机においてるよ〜」

部屋に戻った未来に、ベッドでゴロゴロしていた響きが声をかけた。

未来の体に取り付けられていた装置の解析しだいでは、再び目が見えるかもしれないと聞いてから響きは常に機嫌がいい。

「ただいま〜。なんだろう？ 私宛って」

机に置かれていたのは少し厚みのある封筒だった。宛名はジークフリートとなっていた。

「ジークフリートって、ラインの黄金の英雄よね？」

封を切つて中に目を通す。

『これを君が呼んでいるころには、私は良くて監禁、最悪死んでいる事だろう。この書類はマリア達の適合係数を低リスクで上げるための薬品の調合リストになっている。これを二課に届けてほしい。彼女たちの命を永らえるためのものだ。彼女たちは罪の減免と引き換えに装者として使われる事になるだろう。その彼女たちの一助となるはずだ。よろしくたのむよ。追伸、優しい君の事だ。ボクの事を話さない事に気を病んでいるだろうか？ボクとしては生涯黙っていてほしいところではあるのだが、君が良いと思つたときに話してくれてかまわない。君が響く人と健やかにある事を願う。英雄になりたかつた男より』

一枚目の手紙以外は難しい記号などでわからなかつたが、誰からのものかは、すぐに分かつた。これがウエル博士の言っていたものなのだ。

「響。ちよつと二課にいつてくるね。指令に用事思い出したから」

「ん〜。一緒に行くか？」

「大丈夫。響きもまだ完全に調子戻ったわけじゃないんだから、ゆっくりしてて」

「はくい。いつてらつしやくい」

「そうか。ウエル博士がこれを」

未来から誘拐されていたときにウエルと話した事、そしてウエルから届いた封筒を渡され、弦十郎はつぶやいた。

「はい。あの人こそ英雄だったんだと、私はちゃんと知っていてほしいと思います。マリアさんたちに伝えるのはまだ先の方がいいとは思いますが、その判断は指令に任せたほうが・・・」

「いや、それは未来君。君が決めたまえ。それがウエル博士の望みだろう。響君の目の子とも、Linkerのことも二課が何とかした事にしよう。それが覚悟を決めてやり通した漢への礼儀だ」

「漢、ですか」

「そう。漢のプライドの話さ。バカだとおもうか？」

弦十郎の言葉に未来は苦笑を浮かべて首を振った。

「いいえ。かつこいいと思います」

「そうか。そう言われて博士も満足だろう」

「だといいいんですけど。男って面倒くさいものなんですね」

「まったくだ」

二人そろって苦笑を浮かべた。